

立命館大学文学部キャンパスアジア・プログラム

—東アジアにおける3大学間国際プログラムの共同運営—

Campus Asia Program at College of Letters, Ritsumeikan University:

Tripartite Management of International Education in East Asia

立命館大学文学部准教授キャンパスアジア・プログラムマネージャー 廣澤 裕介

HIROSAWA Yusuke

(College of letters, Ritsumeikan University)

キーワード：海外の大学との交流、キャンパスアジア・プログラム、3大学共同運営

はじめに

立命館大学文学部では平成23年度より文部科学省の「大学の世界展開力強化事業」である、いわゆる「キャンパスアジア・プログラム」を運営してきた。この事業は日本・中国・韓国の大学が一つのコンソーシアムを形成して、国際的な教育プログラムを共同運営し、東アジアで活躍する人材を育成する、一種のパイロットプログラムとして実施された。本学プログラムは中国の広東外語外貿大学東方語言文化学院、韓国の東西大学校外国語学科とともに「東アジアの次世代人文学リーダーの育成」をテーマに運営してきた。今年が事業の最終年度であり、本学プログラムに参加した学生も4回生、つまり卒業年度を迎えている。

ここでは、この間のプログラムの運営と各大学との連携、学生たちの成長をふりかえり、今後の展開などを紹介したいと思う。

I 本学プログラムの特徴「移動キャンパス」

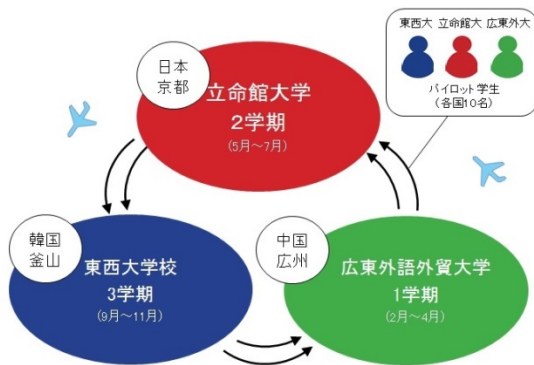
本事業の運営期間に、本学ではさまざまなプロジェクトを企画・運営してきた。以下に紹介するのは、いずれも広東外語外貿大学と東西大学校（以下、広外大、東西大と称す）との連携や協力を得たものである。

①学部生を対象とした「移動キャンパス」

- ②大学院生を対象としたDMDP（修士複数学位制度）および交換留学
- ③学部1回生を対象とした中国・韓国への現地体験プログラム
- ④日・韓・中連携講座

本学プログラムの最大の特徴は①「移動キャンパス」であり、以下、その紹介を中心に筆を進めてゆきたい。

「移動キャンパス」は3つの大学がそれぞれ10名の学生を選出して、合計30名の学生を一つのクラスにして2年間一緒に3カ国をめぐりながら、ともに学び、ともに暮らすものである。3カ国の学生たちは、平成25年2月から広外大で第1学期を迎え、5月から本学で第2学期を、9月からは東西大で第3学期を学び、この3つの学期のローテーションを3回生でも、つまり2年間にわたっておこなった。しかも、学生たちは国際寮やシェアハウスに宿泊するので、大学の教室だけでなく日常生活でも互いに助け合い、結果的に強い絆を結ぶにいたった。これが「移動キャンパス」の学習と生活の特徴である。



「移動キャンパス」の学生移動

生活でも互いに助け合い、結果的に強い絆を結ぶにいたった。これが「移動キャンパス」の学習と生活の特徴である。

その教育的なポイントは、主に3つある。学部生対象のプログラムであること、人文学（文系）プログラムであること、3カ国語学習をすることの3つで、これらは不可分の関係にある。

高等教育機関でおこなわれる国際プログラムは、たとえば語学習得を主たる目的とした学部生対象の交換留学や、大学院生を対象にした国際的な学術経験を持つ各分野の専門家を育成することをめざすダブルディグリー制度など、2国間のものがほとんどだろう。これに対し、本学は学部生を対象にした3カ国間のプログラムとした。大学在学中は中国・韓国の同世代の学生と共同学習、共同生活をして強い友人関係を築き、卒業後は企業や自治体などの職場、地域社会やサークル、ボランティアなど、多様な文化背景を持つ人々がつどう集団・コミュニティの中で、異文化理解・多文化間調整の能力を発揮することを念頭に置いている。わかりやすく言えば、日中韓3カ国語が話せる一般社会で活躍するリーダー、というイメージである。

人文学は、人間、社会、歴史、生活を学問の根底に置いて成り立ち、東アジアで生き、活動することそのものが東アジアの人文学とつながっている。

「移動キャンパス」は、現地で、現地の言葉で、現地のことを学ぶことを原則とした。中国では中国語で中国の歴史を学び、韓国では朝鮮語で韓国の文化を学ぶ。日本では、中国・韓国の学生が日本人学生と一緒に、日本語で、日本の社会を学ぶのである。これにより、机の上の学問でもなく、インターネットの中の「リアル」でもない、生活の一部となった現地、目の前にいる他者の言葉、人間が織りなす文化・社会・歴史を、みずから体験し、学習し、実践し、その一部となる新たな「まなび」

が成立する。学生たちは「現地化されたまなび」の中で、多国籍で多文化の環境に身を置き、まさにグローバル(global+local)の実践を経験することになった。この東アジアらしい学びのあり方には、英語を介在させるより、現地語がふさわしいだろう。



日本ではシェアハウスで共同生活



日本での演習授業は日本語で

3カ国語学習の大要はすでに述べたので、その学習効果を追記しておきたい。日本人学生10名のうち、大学入学以前に中国語・朝鮮語のどちらか一方を公的・私的に一定程度学んだことがあるのは3名にとどまり、7名は両言語とも未学習であった。3年後(4回生前期)の両言語の語学試験(HSKやハングル能力検定試験など)はそれぞれ9名が各試験の最上級かそれに次ぐ級に合格しており、つまり10名中8名が両言語のトップレベルの語学力を身につけたことになる。彼らは大学4年間でトリリンガルに成長したといえ、しかもその語学力はきわめて実践的で、両国での生活経験と人的ネットワークを持つのである。

プログラムに参加した中国・韓国の学生もみな日本語能力試験のN1レベルに到達しており、20名中7名はこの夏に日本の企業や自治体でインターンシップに参加するなど、これまでに培ってきた力を一般社会で実践するまでになっている。



新聞社主催小学生サマーキャンプにリーダーとして中国・韓国の学生が参加



広州の日系企業でインターンシップをする日本人学生

Ⅱ プログラム前史

本プログラムを共同運営する広外大と東西大とは、実はキャンパスアジア以前から授業を共同開講してきた。それが「日・韓・中連携講座」である。この授業は平成15年に本学文学部と東西大大学院日本地域研究科の間ではじまり、19年には広外大も加わり、3カ国の学生・院生が互いに学びあう授業となった。



日・韓・中連携講座（遠隔講義）

その授業の進め方には2つの歯車があった。学期期間中は、インターネット回線を用いた遠隔会議システムで3大学の教室を結んで、各国学生たちが共通テーマについて自国の状況をプレゼンし、3カ国でディスカッションをする。長期休暇中には3カ国のいずれかの国に集まり、直接顔を合わせて、ディスカッションやフィールドワークをおこなう集中講義。この両輪によって学生たちは互いの国を深く知り、同世代の学生と真摯にふれあい、その後に互いの国

へ留学、就職、さらには国際結婚をするカップルを生み出してきた。

この授業から得たものは大きかった。3カ国の学生と一緒に学ぶことの意義、その楽しさとむずかしさ、そして各大学のスクールカラーなどを知った担当教員や履修生が、のちにキャンパスアジアに携わることになったので、手探りで始まったプログラムの初期段階にはその経験が役だった。さらに、この授業の各大学の担当教員の間にはすでに信頼関係ができており、時に一致協力し、時に遠慮なく意見を出し合う間柄になっていた。この授業をはじめた東西大の李元範先生と本学の桂島宣弘先生は大学院時代から交友があり、それを起点として「日・韓・中連携講座」、そしてキャンパスアジアへと発展してきた経緯もある。「移動キャンパス」中も、日本学期で東日本大震災の現地研修を企画中に学生からさまざまな意見が出た際にも、両大学教員からの理解とサポートがあり、また中国学期で日本人学生が虫垂炎に罹ったときなどは、単に大学間の事務的な連携を越えた対応をしていただいたと感謝している。

この特異な国際プログラムの基底には、教員どうしの古く深いつながりがあることを付言しておきたい。



日・韓・中連携講座（集中講義）

Ⅲ 3大学教職員合同会議と運営体制

上記のように共同運営する両大学とは長年良好な関係を築いてきたが、キャンパスアジアに関しては、毎学期ごとに3大学教職員合同会議を開催し、プログラムに関わるあらゆることを議論し、その

決定に従って実行してきた。各大学の学期運営と授業内容の確認や、次章で紹介する授業の方針や内容の決定、および相互授業参観などを行ってきた。その名の通り、教員だけでなく、運営を支える職員も同席して、その時々の問題を共有し、解決にむけて互いにアドバイスや協力をしてきた。そしてその下部に3大学の実務担当者による会議体を組織し、プログラムの細部の具体的な調整をおこなってきた。

これらの会議の共通言語は日本語であった。広外大のスタッフも東西大のスタッフも大半が日本への留学経験を持つため、この会議は英語ではなく、日本語が公用語になりえたのである。国際化や国際交流といえば、「英語」を真っ先に考えてしまいがちだが、ここにはグローバル言語としての日本語の可能性があるとされる。

少々話題が逸れるようだが、これは日本の戦後70年の歴史のたまものとも言える。戦後の日本は、過去の戦争を反省し、アジア各国に対して謙虚で友好的な態度で接し、そして経済、文化、科学等の分野で世界的に存在感を示してきた。それゆえに東アジアから若い人材が集まり、日本を学ぶ、日本



三大学教職員合同会議

で学ぶ留学生たちを歓迎、育成してきた歴史がある。日本にいると気づきにくいですが、留学生たちにとって自国を出て日本に来たことそれ自体が国際的な経験なのである。彼らにとって、日本語は外国語であり、国際語であり、日本語学習経験者間では共通言語となり得るのである。この合同会議はその恩恵に与る一例であり、東アジアでの学術をベースとした交流では、このようなケースもめずらしくなくなるのではないだろうか。

もちろん、大学間の連絡は日本語だけですむわけではなく、中国語や朝鮮語でのやりとりも大量にあった。本学では両国への長期留学経験者と両国出身の教員を配置し、また広外大や東西大でも同様の教職員配置を行った。また、プログラムを支える設備として、3大学の教職員全員が参加するメーリングリスト、3大学で共有すべき重要文書等の保存をするオンラインストレージ、また授業のシラバスや成績などを一元管理するポータルサイト、学生への「到達度アンケート」などを共同で開発し、活用した。3つの大学が共同でプログラムを進める背後には、各大学にそれぞれの学内の事情、国内の教育関連機関との調整などがあり、3大学間の情報の伝達や共有に関しては管理しやすく、速やかな対応がとれる体制を構築しておいた。

IV 海外の大学との教学面での協働

プログラムの運営については、全体的な方針から各授業の内容など、さまざまなレベルで共通事項を取り決め、その上で各大学の裁量を認めてきた。以下に、その一部を紹介する。

①カリキュラム構成やプログラム内容

「移動キャンパス」における語学科目と専門科目の割合を、各大学とも1年目は5：5、2年目は3：7をベースとすることにした。また1年目の専門科目には、学生のプレゼンテーションを中心とした演習授業、また文化体験の授業を置くこととした。そのほかキャリア形成プログラムを各大学でおこない、4年生時にはインターンシップを実施することとした。

②共通の授業運営方針

26年度には3大学が東アジアを考える演習授業をそれぞれ置くこととし、3つの授業は共通の4つのテーマ（若者、情報通信など）をさまざまな形で取り上げ、学生たちがそれぞれの国や社会の状況を比較対照できるようにした。

③共通の授業内容

25年度に各大学が自国の歴史に関する通年科目を置くこととした。広外大の教員が中国史、東西大の教員が朝鮮史の授業をおこない、本学では日本の高校の教科書を読みながらその特徴を考える授業をおこなった。



「20年後の東アジアへの提言」



京都の伝統文化にふれる

このように3大学で大まかな取り決めをしたものがある一方、各大学がキャンパスアジアならではの独自の授業も実施した。その一例を紹介しておきたい。

たとえば本学では「20年後の東アジアへの提言」をテーマに、日中韓の学生各1名から構成される10のグループを作り、グループごとに東アジアが抱える各種問題について解決手段を考え、発表する授業をした。東西大では東アジアの領土問題をとりあげ、3カ国学生混成グループでディベートをする授業をおこなった。所属するグループによって日本人学生が中国や韓国の立場で、あるいは中国、韓国の学生も日本の立場で資料を調査分析し、グループとしての主張をしてゆく。自国以外の立場で発言するには、その主張を十分に理解することが前提になり、そうした理解と意見のやりとりを経て、最終的に各国の主張と問題の複雑さを考える授業となった。

V おわりに 平成28年度からの新プログラム

前述のように、文部科学省の事業としてのキャンパスアジア・プログラムは本年度でいったん終了することになる（28年後期から継続的な新プログラムが準備されていると聞く）。本学文学部ではその人材育成の意義を強く自覚し、また今年度より始まったスーパーグローバル大学創成支援事業と連動し、28年春からキャンパスアジアを常設プログラムとして新たにスタートさせる。

新プログラムは、毎年各大学で20名の学生募集をする。現プログラムは4年間で1期だけのプログラムだったが、来年度からは毎年新しい学生が参加するので、交流規模は飛躍的に拡大する。

規模の拡大に伴い、現プログラムから変更せざるをえなかった点も多いのだが、2・3回生で中国、韓国を2周まわる方式は形を変えて堅持することになった。現プログラムの学生たちに学習、行動、



新プログラムのパンフレット

意識の面でのめざましい成長が見られ、教育効果が高いと判断されるからである。

まず第一に、語学の修得に利点がある。中国にせよ、韓国にせよ、現地での長期の学習機会（期間）が2度あるため、修得した言語の定着の度合いが1年間の留学よりも高いと認められる。

第二に、海外での学習・経験の重層化に伴う理解考察の深化がある。たとえば、ある日本人学生は、中国で中国の状況を学んだ後に韓国での学習・経験があり、次に中国で学ぶ時に前年に学んだ韓国の状況と比較対照ができる。こうして東アジアに関する幅広い知識、視野、経験をj得て、より高度な理解や考察にいたると考えられる。

第三に、再チャレンジ精神の養成である。2年目には、1年前の自分をふりかえり、やり残したことやうまくできなかったことに自主的に計画的に取り組む姿が見られ、学習面以外でも、タイムスケジュールの管理、セルフマネジメントの意識の高まり、精神面でのたくましさ、コミュニケーションや行動の範囲の拡大など、多面的な成長が見られた。

また、2周まわることで、その土地やそこに住む人々への愛着も深まっていた。ある日本人学生は「中国や韓国が自分の一部になった」と語り、日本の伝統あるホテルで4週間のインターンシップをおこなった韓国人学生は「もう職場に行けないと思うとさびしくてたくさん泣きました」とその最終日のことを話した。彼らはSNSや電子メール等で日常的に3言語チャンポンで連絡を取り合い、また現地で友人になった中国人女子学生の進路や、兵役に就いた韓国人男子学生の生活を気にかけている。そして、広外大のある中国広州、東西大のある韓国釜山、そして日本の京都、立命館を懐かしみ、思いを寄せる3カ国学生の姿がある。ここには東アジアの新しい世代のつながりが芽吹いている。

キャンパスアジアの経験から学び得たことは多い。新しいプログラムはこれまでどおり3大学で協議しながら作り上げたが、それらを活かしたところも、残念ながら活かせなかったところも、そして

新しくチャレンジすることもある。今後、部分的な修正を加えながら、その時代にフィットし、次の世代の東アジアの人材を輩出するプログラムになってゆければと考えている。



キャンパスアジア国際フォーラム

なお、今秋、本学プログラムに参加した学生たちの成長をテーマに、以下のようなフォーラムを実施することを予定しています。学生たちがみずからプログラムの経験を語り、言語文化教育学、国際教育学、生涯発達心理学の分野からの分析などを報告する内容となっております。ご関心を寄せていただいている教育研究分野、あるいは大学生、留学生、高校生など、多くの方々にご来場いただき、学生たちの声に耳を傾けていただければと考えておりますので、是非ご参加ください。

名称： リーダーズフォーラム「日中韓キャンパスアジアでの学びとその可能性」

日時： 2015年10月28日（水）16：00開場 16：30開演

場所： 立命館大学（衣笠キャンパス）創思館カンファレンスルーム

内容： プログラム紹介、学生の体験談、各分野の研究者による分析、座談会

（紹介パンフレット <http://www.ritsumeai.ac.jp/file.jsp?id=221208> ）

入場： 無料

お問い合わせ： 立命館大学文学部事務室 キャンパスアジア事務局

電話：075-465-8187 E-mail:c-asia@st.ritsumeai.ac.jp